

## 【トップインタビュー】 ◇「ルーツ・オブ・ジャパン」でプロデュース＝仲川元庸・奈良市長

13/09/26 09:50 NG045

この人が奈良市（36万5000人）の魅力を語り始めると、止まらない。7月の市長選で再選を果たした仲川元庸市長（なかがわ・もとのぶ＝37）。目下の関心事を尋ねると、「いつみんながこのどえらい奈良の価値に気付くか。ドキドキしている」と真顔で答えた。世界遺産の東大寺やシカが戯れる若草山だけではない奈良の資源をどう引き出し、経済や雇用につなげていくか。「ルーツ・オブ・ジャパン」を掲げた新たな挑戦が始まった。

1期目は、利権やしがらみとの闘いだった。保守的で閉鎖的な古都の政治風土。180億円もの負債を抱えた土地開発公社の清算や、全入居者の2割に上る市営住宅長期滞納者に対する一斉訴訟など「誰もがおかしいと思いながら、誰も手を着けてこなかった問題」に果敢に切り込んだ。

後押ししてくれたのは退職して地域に戻ってきた団塊世代の人たち。「どうせ奈良は変わらない」と諦めるのではなく、自分たちが暮らす街に愛着とプライドを持ってもらう。「シビックプライドを高めることが困難を乗り越える最大のパワー」になったという。

では、変わり始めた奈良を2期目の市政でどう導くのか。仲川氏自身は「市長は行政の領域だけでなく、民間セクターや地域住民の暮らしも含めて地域全体をプロデュースしていく時代」だと強調する。

内外から年間約1300万人の観光客が訪れる奈良市。その最大の課題は「通過型観光からの脱却」だ。経済界に根強い「まずホテル誘致ありき」ではなく、「ホテルが進出したくなるような条件をどう作り出すか」に知恵を絞る。キャッチコピーの「ルーツ・オブ・ジャパン」には、日本の原点である奈良のまだ知られていない魅力を掘り起こし、新たな日本文化として再発信したいとの思いが込められている。

例えば、築100年の格子の町家が残る市中心部の奈良町地区。落ち着いた街並みにおしゃれなカフェや雑貨店がオープンし、散策する観光客で寂れかけた商店街が息を吹き返した。閑散期に当たる冬場の観光の目玉として来年2月には、世界遺産の7社寺を舞台に茶道三千家による4000人規模の大茶会も開催する。奈良出身の室町時代の茶人、村田珠光にちなんだもので、二大茶会で知られる東京の「大師会」、京都の「光悦会」に続いて、奈良の「珠光会」が名乗りを上げる。

もう一つの目玉は、棚田と昔ながらの里山の風景が広がる東部地域。「日本人の暮らしの原点」という農村資源を活用してグリーンツーリズムを進め、「関西の軽井沢」を目指す。また、この地域で作られる高品質の大和茶や特A米のヒノヒカリ、日本酒などの特産品を「戦略作物」と位置付け、都市部や海外への売り込みも強化する。

市長はこうした課題に取り組むため、職員に「一歩踏み出す力」を求める。そのためには「いろんな情報を仕入れて自分で判断し、未来予測を立てる」という作業が不可欠だ。「変化に気付くセンサー」を身に付けて初めて、トラブルをいち早く察知し「予防的観点から施策を打つ」という動作も可能になる。

ただ2期目には、深刻な財政状況の改善に加え、火葬場やごみ焼却施設の建て替えという「非常にセンシティブ」な問題も控えている。とかく疎遠だった市議会との丁寧な合意形成と住民の理解がなければ、話は前に進まない。職員の一歩踏み出す力と、若き改革派市長の胆力が試される。

〔横顔〕趣味は「人と出会うこと」。「世界観や視野が広がる」からだというが、実は幼いころからクリーニング配達や工事現場のおじさんたちとおしゃべりする「変な子ども」だった。3歳と1歳の男児の父。結婚してからは得意の料理をさせてもらえないと嘆く。座右の銘は「未来を信じ、未来に生きる」。

〔市の自慢〕暇さえあれば眺めているという空。「空の広がり表情は奈良の最大の売り」と断言する。イチ押しは平城京跡や東大寺二月堂から見る空。若草山の芝生に映る雲の影を眺めるのもお勧めとか。

〔ホームページ〕<http://www.city.nara.lg.jp/>

（奈良支局・稲葉功）（了）（2013年9月26日配信）



仲川元庸・奈良市長